
とある邪眼の蛇遣い座

廻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある邪眼の蛇遣い座

【Nコード】

N3480U

【作者名】

廻

【あらすじ】

一人の少年がいた。その少年は欲深く、普通の生活を満足できなかった。そんな普通の少年が送る、やはり普通のチートで転生な最強ではない物語。

プロローグ

僕は、暗く、深い。明るく、まどろむ。世界の境地、一個の限界。
歩くたびに、世界を踏みしめ、走るたびに、空を斬り裂く。

そんな人物に憧れていたはずだった。けど、実際の僕は、落ちこぼれで、どうしようもなく頼りなくて、格好いいところなんかなくて、弱々しくて女々しくて、普通の現実が辛くて、けど妄想には逃げたくなくて……。

なるようになれない、ただただ普通の、どこにでもいる一高校生。最近、やっとのことで高校二年生になれたんだった。

生活には慣れようと必死だったけど、慣れようとすると余計に慣れないもので。気づかないうちに、慣れていた。

友達もいるし、なにより彼女ができたことがうれしかった。

世間的には、リア充と呼ばれるのだろうか？まあ、どうでもいいんだけど。

それでも満たされないのはなぜだろう？ それは僕が欲深い浅ましい人間だからだろうか？

浅ましくてもいいから、これ以上のものを望んでしまった。大抵の人が踏みとどまるラインを、一歩だけ、踏み越えた。

一步は、一京歩ぐらいに感じただろうその長さ。

僕が求めたのは、名声。

別に、道路に飛び出した小さな女の子を助けたかったとかじゃない。まったくもって違うと言っていていいだろう。

ただ、彼女を助けた後のみんなの歓声が欲しかった。

それは、甘くてどろどろとした、魅惑的な誘惑だった。

迫る大型トラック。鳴らされることのないクラクション。気づかれていない。

思わず、目の前の女の子を抱きしめた。体全体で覆うように、衝撃一つ与えないように。

僕の体は、激しい衝突音とともに数十メートル吹っ飛ばされる。初めての空中飛行は、なかなかの感動ものだったけど。

一瞬の浮遊感の後、背中から思いつきり黒いアスファルトに叩きつけられる。

絶息する僕。

抱えている女の子を見た。すると、おでことほっぺたにかすり傷を負ったみたいで少々泣いているが、大事には至らなかったようだ。

なぜかホッとする僕。

あれ？おかしいな？僕が求めていたのは彼女の安全ではなかったはずなのに。

まあいいかと、大きな深呼吸をする。

いきなり空気を肺に入れたのが悪かったのか、大きくせき込む僕。

口から血があふれだしてきた。だくだくと、滝のように。

僕の体を伝いながら、どんどん溢れて行く。

女の子をだっこしていた胸のあたりを見る。異常はない。

背中に手をまわしてみる。大きく陥没していた。

これでもかと言わんばかりに、握り拳がすっぽり入ってしまうぐらい、大きく陥没していた。

そういえば、角にぶつかったなあと冷静に思い出す。

もう一度女の子に目を向ける。くりくりとした目を持った、可愛いらしい女の子だ。

その眼、一杯に涙を溜めながら、僕を見あげていた……。

「神流^{かなな}！」

若い女性の声だ。それが僕の後ろ側から聞こえる。

「おかあしゃん！」

僕の胸から飛び出す女の子。神流というのか……。

奇遇だね？　僕とイッショだよ……。

もう一度大きくせき込む。咳き込むたびに飛び散る血液。

青ざめる僕の肌。血の気が引いて行くのが分かる。

女の子とその母親を見た。母親の方は慌てふためいて、携帯を取り出し、何かの番号をうっている。

恐らく、救急車でも呼んでいるんだろう。

女の子は、母親の足元で泣きじゃくっている。

大方、血液が怖いんだろう。

僕は……僕は、なんなのだろうか？

名声を求めて、死を与えられた。

結果は人救いだっただけ、原因は醜い欲望だった。

終わりよければすべてよしと言っけれど、僕は、終わりも何もかもダメだった。

けど……。

「おじよーちゃん……」

空気が抜けたようなかすれた弱々しい声が何とか出た。

その声に反応して、泣きじゃくっていた顔を上げて僕の方を見る女の子。

「けが、してないかい？」

「うん……」

泣いてしゃくりあげている喉の奥から、僕とは違う力強い声が上がってきた。

「そう、かい……」

何だか眠くなってきた。

今振り返れば、僕の人生もなかなかのものだったと思う。

味気のない、味わい深い人生。

お米一粒を何度もかんで、甘みを出した。

幼稚な表現、乙とも言ってくれればいい。

「——十分、だ」

目を閉じてみた。

僕の意識は眠気に負ける。

本当は、こんなことしなければよかったと、心のと真ん中で思っている。

けど――。

〓

〓

目を覚ましたのは、どろどろでぐちゃぐちゃした、なんかすごいところだった。

そこでは、裸の人間達が、黒い生物、いや、化物に追いかけ回されたり、手に持った棒で串刺しにされたりしている。

不思議なことに、血がまったくもって出ずに、放り投げられた人は数分後に向くりと起き上がる。

それが、何回も、何回も何回も何回も何回も、終わることなく、終わらされることもなく。

刹那のような永遠が、無限のように繰り返される。

永遠が刹那のように過ぎ去ったとしても、永遠は終わらない。

気がつけば、僕の前に、黒くて大きな化物が、仁王立ちしていた。それも二つ。

僕もあんなことされるのかと、変に冷静に落ち着いて傍観していたけれど。

その二つは、僕を小脇に抱えてどこかに連れ去った。

よく見れば、背中には漆黒の両翼がついている。尻尾も付いている。

ああ、これ、悪魔じゃないか……。

周りを見渡す。べたべたな地獄の風景だった。

あれ？僕、地獄に落とされるようなことしたっけ？

そんなことを思っていると、吹っ飛んでいった景色が急に止まり、二つの悪魔が、僕を何か大きな何かの前に、突き出した。

「……カッケエ」

僕の前には、漆黒の十二翼を背に携えた、威厳ある現象がいた。

存在そのものが現象。物体やそんなもので言い表してはいけない、絶対的現象。

台風や津波なんかの天災以上の、異常な現象。

それが、薄い布一枚を羽織って、そこに顕現していた。

「なんだ？ この薄汚い小僧は？」

そこから、地獄の底（ここが地獄だ）から響いてくるような、冷たい声が、地獄全体に響くように僕の体を貫通する。

「バアルよ。どういうことだ？」

僕の右側にいる悪魔に向かってそういう。

バアルというと、ソロモン72柱の序列一位。

「ルシファー様。この地獄のコミュニオン内、それも最下層で正常な意識を保っていられる存在は我ら悪魔の中でも最上位の者だけ。それが……」

僕の方を見る三つの現象。

「こいつは、正常な意識を以って、数万年間、この地獄の最下層で存在していました」

「異例事態なのです。異例も異例。天使が墮天するほどの異例です」

「なんだ？ 侮辱しているのか？」

ルシファー。神になり変わろうとして、天上から墮とされた、最高位の熾天使。セラフィム

「そんなことはありません。ただ、それぐらい、異常なことなのです」

「アガレスよ。だからどうすればいいと言っのか？」

アガレス。同じくソロモン72柱の序列二位。

「とりあえず、適度な大きさになってもらえませぬか？ 首が痛いのですが」

甘ッ！？

「む。分かった」

一瞬の闇の発光ののち、僕の前に女性が現れた。この世のものは思えないほどの黒。

「……カッケェ」

女の姿になっても、その格好よさはいまだ変わらなかった。

「なにをしている？ 跪け」

その言葉に対して。僕は考えるよりも早く、行動した。跪いた。

全身全霊の力を以って、跪いた。

「で？ この薄汚い小僧はどうすればよいのだ？ 噛み砕けばよいのか？」

ぺろりと、線上的な表情でこちらを見つめる。

「本望ですッ！」

僕の口が暴走した。

「ふん。私の口が穢れるから、やめる」

だそうだ。

「だから、コイツはどうすればよいのかと聞いている」

少しいらしたように、二つの悪魔に向かって問う。いや、答えを言うように命令している。

「今、天界の神々の間で、このような人間を違う世界へと転生させるのが流行のようです」

なんだ？ その人道にもとる行動は。人じゃないけど。

「下らないことをしているのだな。よほど暇と見える」

ルシファーが可笑しそうに、犯しそうに笑った。

背筋も凍るような、美笑だった。

「いいだろう。丁度暇だったところだ。転生ぐらいさせてやろう」

……転生って、転生だろう？

だいたい、転生したって同じような人生が待ち構えているのは目に見えているだろうし。

「おい、小僧。名を教えろ。まずは契約だ」

悪魔の悪魔王と契約って……オカルトは、信じてなかったんだけどなあ。

「——氷岬ひみさき 神流かなな」

劣性遺伝子の証である、氷のような薄く蒼い瞳。

肩までの流れるような黒髪。

らしかった。らしいというのは、僕が鏡をほとんど見ないせいで、自分の容姿など、格好悪い以外知らなかった。

「光栄に思え。私と契約できるのだ」

「契約って、キスとかするんですか？」

「淫らな方の契約を望んでいるのか？」

らしかった。

「穢らわしい人間ではあるが、可愛らしい顔つきだ。そこそこ楽しめるかもな」

魅惑的な笑みだった。

「いえ、僕が死にそうなのでやめておきます」

「ふん。まあいい。契約だ」

僕と、ルシファアの体が黒く光る。

「『汝、我に永遠の従属を誓うか？』」

「誓います」

一つ。

「『汝、我の存在を受け入れることを誓うか？』」

「誓います」

二つ。

「『汝、我にその全てを見せることを誓うか？』」

「誓います」

三つ。

「『ならば問う。汝、我と契りを結ぶことを誓うか？』」

「誓います」

四つ。

黒い光が、爆発的に光量を増していく。地獄全体を包み込むかの
ように。

「契約は成立だ」

僕の背中に、漆黒の翼が生えた。そこを中心に、翼の紋章が。

「墮天使の力だ。あと、契約の見返りとして貴様に能力を付与することになっている。自分で選べ」

ようするに。好きな能力を選んでよいと。

ふむ。

「漫画とかの能力でもいいんですか？」

「お前の意識の中にある情報だったら何でもよい」

便利。

「じゃあ……美堂 蛮の力がいいです」

理由？ なんとなくだ。

「ふん。能力付与は終わった。あとは世界なのだが……」

ルシファーが困ったような顔を見せる。それがなんとも可愛らしい顔つきで。

「どうしたんですか？」

「これほどの力だと、中途半端な強度の世界では、私が楽しめないだろう。だから、いい世界を覗いているんだ」

世界が覗けるらしい。便利。

「——『とある魔術の禁書目録』か。ふむ。それなりの強度だな」

……聞いたことない。魔術って……オカルトじゃん。

「では、送るぞ」

まあ、文句はないけど。

僕の体が、質量を持ったかのように重い光に包まれる。

「ルシファーさん」

「なんだ？」

「大好きです！」

「戯けたことをぬかすな！」

最後に一つだけコントをして、地獄を去った。

惜しむらくは、ルシファーの淫らな契約というのを断ったことだろうか。

まあ。どれもこれも。僕の感知外だ。

プロローグ（後書き）

主人公は多分魔術side！

多分ですよ。

「はいはい。おっぱいでちゅよ」

グハア！？

僕、ダメージつける。僕、瀕死の重傷を負った。

回復薬を使いますか？ NO！

自堕落に生活しますか？ YES！

ばわわわあああああん。

あれ？なんだ？ この回想終わりましたよ的な擬音は。

ああ、なんだ。僕は現実から逃避をしていただけなのか。

なんで僕は、空中落下を開始している？ 何で雲の上にいる？

「僕の名前は戦場ヶ原ひたぎ。体重と呼べるものがないから落下してもだいじょうびやああああああああああああああああああああッ！？」

とりあえず、落ち着け。僕には堕天使様からもらった、素敵な素敵な黒い翼があるじゃないでござんすか。

……………あり？ どうやって翼を出せばいいんだ？

落ち着け。もう一つあるはずだ。美堂 蛮の能力が…………。

あれ？ 意味なくね？

どんどん加速していく僕の体。重力加速度は9・8だったなーとか、公式はなんだったけ？ とか。

馬鹿丸出し。バロス。

「もう、地面衝突の時に、相殺できるぐらいの暴力をぶつけるしかないな」
チカラ

はい、超理論きました。

説明しよう！超理論とは、理論を超えた理論のことで、ようすに屁理屈のことである！

まあ、デモンズアーム悪魔の腕は、寿命縮めるから使用は結構避けたい。

なので、アスクレピオス蛇遣い座の番だ。

「【今こそ汝が右手に アスクレピオスその呪わしき命運尽き果てるまで 高き銀河より降りたもう蛇遣い座を宿すものなり】」

呪文を唱えている間も、どんどん近づいて行く地面。雲を突破したところでこれが雨雲だということに気づく。

もう、あと数秒で地面と激突。さらば人生。こんにちはスプラッタ。

させん！！

トラックに轢かれたのと、大して変わらないじゃないか。

そう思っていたが、僕の体はそのままに美堂 蛮の力を入力した
僕の体は、その程度で死ぬようにはなっていなかった。

と、いうよりさ。僕の体、結構縮んでるよね？

あ、あはは……。

「笑えない、冗談だ……」

作品的には、使わないほうがいいんだけど……。

「ほんと、戯言だぜ……」

冷たい雨に打たれる僕の体。

最後に。本当に最後に。僕の意識が離れる直前に。僕が見たのは。

きれいな、教会だった。

〓 〓

「この子は誰なの？」

まだ。まだ、土御門に仕込まれていない喋り方で話す金髪の女性。
イギリス清教の最大主教、ローラアークビショップスチュアートである。

それが、ピンクのフリルのついた傘をさして、かなり深いクレ

ターの中心にいる少年を見ながらそう言う。

「けど、この規模の魔術を行使できるって、かなり凄いわよね…」

□元に指をあてる。

「とりあえずは。引き取りましょうか」

時には残酷無比の悪女になり
時には善行慈愛の聖母にもなる。

それが、イギリス清教最大教主。ローラ＝スチュアートその人であつた。

「最終兵器にはなりえなくても切り札には、なってもらうからね」
リーサルウェポン ジョーカー

にこやかに爽やかに清々しく。
皮肉と失墜と広大さで。

彼女は、少年。氷岬 神流を、イギリス清教第零聖堂区・必要悪
リウス ネセサ
の教会に、ほとんど無理矢理に入会させた。

「いいから入りなさい！」

「やだ！！」

「感嘆符を増やしても駄目よ！！！！」

「あんただって増やしてんでしょうが！！！！！！！」

「メタ発言をすると消されるわよ！！！！！！」

「そっちの方がメタだっつーの！！！！！！！！」

この時、神流の肉体年齢10歳。

ここから、氷岬神流の、普通にチートで最強ではない、ごたごたと入り組んだ簡潔的で間欠的な、どうしようもなく中途半端な物語が始まる。

邪眼と幻想殺しが
イマジンプレイカー

相まみえるとき

物語は始まる。

第一夢：イギリス清教最大主教（後書き）

みなさん。邪眼を知っているでしょうか？

おそらく、石にする方のことを思い浮かべる方が9割でしょう。多分。

うひひ……ひみつです。

ggg たらでてくるかも（・・w・）ω・）A。 （ ; ）

第三夢：僕が戦う理由

僕です。氷岬 神流です。

僕が何故こんなにも丁寧な口調で話していると言つとですね？

「神流。 次の任に赴くべからずなのよ」

「何を言っているのかさっぱりですなあ。あと、その馬鹿っぽいエセ日本語はやめてください」

目の前には、清楚な清楚なお淑やかで物静かでどこぞのお嬢様と言わんばかりの女狐がいます。

僕を必要悪の教会とかいう宗教丸出しのところに入会させた張本人です。

僕は言った。いやだと。

コイツは言った。入れと。

仕方なく入ったら、まあ、なんだろう？

宗教の勉強みたいなの？ 全ての人に幸せをみたいなの？

いや、その考え自体はとても素晴らしいんだけど、素晴らしいんだけど、僕には肌が合わないっていうか、体が拒絶反応を起こすっていうか。

そんなこんなで4年間。なんとなく宗教の勉強をしたり、いろんな人に出会った。

「にゃー。日本人だにゃー」

金髪にサングラス。前の開いたアロハ系のシャツを着こなす、エセ土佐弁を操る土御門 元春。

こいつの所為だ。ローラがエセ日本語をしゃべるようになったのは。

あの清楚で賢そうな話し方のローラが忘却の彼方へと吹っ飛んでいったのはこいつの所為だ。

恨んでやる。

そう言えば。僕は多様に言語が喋れるようで、フランス語イタリ
ア語、英語はもちろんよく分からない言語まで話せた。

美堂 蛭、万歳である。

「また。柔らかい人もいたものですね」

Tシャツとジーンズが魅力的な、長髪の美女。これでも僕より2
歳しか年上じゃないというのだから驚きである。神裂 火織。

なんていうか……声がかげづらい人です。はい、喋り方が無機質
なんです。

けど、なんていうか、腕の方がかなり凄くて。一緒に任務に行く

ときは、うん、僕は隅っこで体育座りになっただけでも終わっていた
ほどである。

もちろん、その後怒られまくったが。

「なんていうか、馬鹿ばかりだね」

「つまらんギャグ馬鹿っぽいよ」

巨軀に赤髪ピアス。右目の下に掘られたバーコード。これで僕より二歳も年下というのだから、笑ってしまいますよ。ステイル＝マ
グヌス。

ルーン魔術を今、超の上に超が三つほどつくぐらい修行中の、神
父さんである。

炎が、熱いんだ。あと、未成年なのにタバコはいかんよタバコは。

「いやな予感がしたりけるのよ」

「僕には、馬鹿なあなたしか見えません」

今日は、なにかと五月蠅いローラ。嫌な予感とか何とか、いつも
は何の気なしに魔術結社に送り出す癖に。

「邪眼の王と呼ばれるようになりけりあなたは、もういくばくか
の人間に命を狙わりけるのよ」

「そこまで心配する必要もないでしょうに。僕はそこら辺にいる
一魔術師となんら変わらないスタンスです。僕個人が消えたところ

で世界は驚くほど変わりはしませんよ」

「……私が、哀しく思いけるわ」

僕はこの人にフラグを立てるようにした覚えはないです。

この女狐。聞くところによると、もう二十年前からこの姿のままらしいじゃないか。

いや、美人だけど。美人だけど。

「いやな予感がしたところで、どうしろというんですか？」

「気をつけて行きたりよ」

……え？

「なに？ ラブコメ的な展開で『行かないでッ！』的なことを期待した僕は馬鹿ですか？ それに任務に赴くなと今さっき言ったばかりじゃないか！」

ぼん、と僕の肩に手が置かれる。その方を見ると

「頑張ってください」

凄いにこやかな笑顔を向けてくる、神裂さんの姿がそこにあった。

……僕、この人に嫌われているのだろうか？

「かなな！」

僕にかけられる、なんか癒し系のソプラノ？ボイス。

銀髪にエメラルドのような緑色の瞳。白い肌に小柄で華奢な体格。服装は純白の布地に、金の刺繍が施された修道服。

「インデックス……？」

思いつきり、仮名である。

魔道書十万三千冊。

一度見聞きしたものを絶対に忘れない、忘れられない完全記憶能力、僕的にはサヴァン症候群だと思うんだけど。

それを有しており、前述した魔導書十万三千冊を脳内に記憶している。

そのため脳の記憶容量の85%を魔道書の為につかっていて、残りの15%しか日常での記憶能力はなく、一年に一度記憶を消さな

ければ生きていけない、らしい。

僕はパートナーになったことがないが、ステイルと、アウレオルスという奴がその記憶を消さないために奔走したみたいだけど、無理だったらしい。

まあ。僕の横にいるこの金髪女狐の策略であることは明白なんだけど。

「ちゃんと帰ってくるんだよ?」

「まあ。ここ以外に帰る場所ができれば、帰ってこないさ」

黒い髪を指ですいて、教会から出ようとする。

「ローラ。まあ、心配してくれてありがとう」

「まあ。告白かしら?」

「ダメレおばさん」

それだけ言って教会を後にした。

〓

〓

「今回の任務はなんだろう? ふむふむ。いつも通り魔術結社をセーギの名のもとにぶっ潰せと。ふむ。ローラは何を心配していたのか?」

ロンドンの街並みをポロシャツにグレーのパンツで闊歩する氷岬。

「お！ カンナじゃねか。今日は飯食ってかないのかい？」

街を通るとかけられる声。ここら辺ではそれなりの有名人だ。

人当たりがよく、なにより外国人だということから、有名人なのである。

「今日はオシゴトがあるからいいよ。また今度一杯食べさせてよ」

「まあ。ちゃんと金を払うんだったらな〜！」

細くしておくが、英語で会話している。

本作品は誰でも親しみやすい作品を目指しております。あしからず。

それから数日、調査を開始する。

彼の場合、主に人伝いでの情報収集である。

下の者に任せたり、そこらへんの構成員を脅したりすればすぐに終わるようだが「なんか偉そうだから嫌だ」という、なんとも中途半端で彼らしい意見で、彼独自の調査を繰り返している。

「合言葉は？」

「名前を言わない」

「OKだ」

と、独自の情報屋や、ルートを確立しており、プロとプレイヤーと大して変わらない働きを見せている。

「ここは……そうか。あざっす」

「アザッス？ 日本語か？」

「うん」

間違った日本語を広げているあたり、土御門と大して変わらないのかもしれない。

薄暗い建物から外に出て、ロンドンの街を更に闊歩する。

彼は、今生活に嫌々しながらも、満足しているような気がしていた。

それは、前世ではまったくもってあり得ないことで。

テストで全校一位になった時も、全国高校生クイズで優勝した時も、彼女ができたときも、友達ができたときも、呼吸をした時も、食事をした時も、生まれたときでさえ満足できなかった。

不思議な感覚で。

想像的な感覚で。

不愉快ではなくて。

むしろ、愉快過ぎるようで。

彼は、この転生に満足し始めている。

「うんうん。このスコーン美味しいな」

外はサクツ、中はフワツとしたスコーンを袋に詰めて街を闊歩する。

それは、外国を楽しむ観光客のようで。

それは、獲物を誘い出す蜘蛛の巣のようで。

夜。いつも通りロンドンの街を闊歩していると、路地裏から人間が飛び出してくる。

この21世紀に、襷褌衣のようなローブに身を包んでいることから、“コツチ”側の人間であることは理解できる。

「最近さあ、街の片隅で遊んでいる子供たちが消えるっていう事件が起きてんだ。それ、おたくらの所為ですか？」

相変わらず、スコーンを頬張りながら襷褌の人間に話しかける。

「宗教とかよく分からないけど、子供に手を上げちゃあいけないよ。そういう奴を見たらとりあえずこう叫びたくなるんだ。このペド野郎ツ！ってね」

スコーンが大量に入った紙袋を地面にそつと置き、襷褌の人間と対峙する。

「【邪眼の王】……蛇遣い座のカンナだな？」

「その中二的成分マックスな呼び名は勘弁してほしいんだけど…」

…」

「……やれ」

檻褸の声色からすると男性だろうか？それが合図をすると路地裏から数十人単位で人間が沸いてくる。

「……ローラの予想的中。悪女の勘は良く当たる」

若干顔をひきつらせながら、一歩後ずさる。

しかし。実戦経験を一年前から積み重ねてきた彼である。

引くわけには、いかなかった。

「一つの個人として、殲滅を誓う。【Serpentarius 666】（全ての存在に変わらぬ幻想を）」

それが彼、氷岬神流の魔法名。この時系列から言えば未来になるが、スタイルが言ったように変換すると

「殺し名」

そう呟き、檻褸衣の男達と対峙する。

瞬きの後、最初に出てきた檻褸の横の男が吹っ飛ばされて川に落ちる。次の瞬間にはその横、更にその横と、次々と川へ落とされていく。

氷岬は、動いている気配は全くないどころか、その場から一歩た

りとも動いていない、……ように見える。

「ど、どんな魔術だッ!?!」

慌てて周りの男達が魔法陣を構築しようとするが、その男どもから順に飛ばされていく。

「魔術じゃないよ。ただのヒット&アウェイだよ」

そう。彼が行っているのは、相手の顔面に拳を決めて、次の瞬間に元の場所に戻ると言う簡単な動作である。

しかし。それを行う彼の速さが段違いであった。

まるで、その場から動いていないような錯覚におそわれるほど。

「ぐふあッ!?!」

最初に出てきた男以外、全ての檻褸衣が川へと落ちた。

「さて、腹ごなし終了時間は……一分つてとこかな?」

「ば、化物め……」

檻褸衣の男が後ずさる。

「当たり前のこと言っなよ。なんせ堕天使様直々の蛇遣い座を宿す人だぜ?」

それを殺しに来たんだろうがよ。

「さて。どうして、子供たちをさらったのか。胃の中のものすべて吐き出す勢いで言っちゃってください」

「い、言えるかッ！」

檻褸衣の男が一瞬で魔術を構築。その属性は水。川の水が槍のように収束し、氷岬へと襲いかかる！

「勇敢であることと、無謀であることは違うんですよ」

そう氷岬が呟くと、水の槍が蒸発。

代わりと言ってはなんだが、氷岬と檻褸衣の男の間に奈落のような穴が出現する。

そこからはい出してくる無数の手。

それが檻褸衣の男を捕まえようと、群れをなして襲つ。

「な、なんだこれは。どんな魔術なんだ！？」

男が奈落の穴の淵まで来ると、穴の中がちらりと見えた。

阿鼻叫喚。その穴の側面から、今檻褸衣の男を掴んでいる手と同じものが、億を超える単位で揺れている。

更にその底では、得体のしれない化け物が、舌舐めずりを。

「答えろよ。子供たちをさらった理由」

ぎこちなく男が氷岬の方を見る。

冷たい。冷たい氷のような蒼い瞳。

鋭い眼光が襤褸衣を串刺しにする。

「調整だ！　ある人の魔術の調整の為にここいらで遊んでいる子供をさらっていたんだ！俺は別にその子供たちに何もしてねえ！脅されてたんだ！やらないや殺すって！やらないや殺されるなら、やるしかねえだろうがよおおおお！！！」

「……そうだな。やられるのなら、やってしまふしかない」

白い手が更に男を包み込み、奈落の底へと巻き込んでいく。

「た、助けて、助けてくれえええええええええええッ
!?」

男が底にいる化物に喰われた瞬間、空間がガラスが割れたように砕け散り、元のロンドンの街並みへと戻る。

「あ……ああ……」

「ジャスト一分——悪夢^{ユメ}は、見れたかよ」

「じゃ、邪眼の王……」

邪眼。相手に一分間の幻影^{イリュージョン}を見せる、運命をも変えてしまう力。

「所属宗派は？」

ほとんど抜け殻のような檻褸衣^{イリュージョン}に対して、氷岬は質問をぶつける。

「ロ、ローマ正教……」

そうすると、男の体から力という力がすべて抜け落ちる。

涎糞尿は垂れ流し、眼は常に白目をむいている。

精神的、破壊である。

「……うん？ ろーませーきょー？ 新しいお菓子のメーカーかな？」

話の流れ的に、宗派である。

「ろーませーきょー……ローマ、正教？……危なそうな匂いしかないんですけど」

氷岬くんは、とても困惑してますよー、とやる気のない声をやる気なくあげる。

「ローラに話してみよっかな？ あれだね。僕個人としてはこんなペド野郎が所属している宗教なんて大したことないと思うけど……。まあ、一応、ね？」

そう言いながら、彼は地面に置いて少しだけ冷めたスコーンの入った紙袋を抱えて、その場を後にした。

「……ローラの馬鹿は、治りそうもないからなあ」

まあ。それも込みで、可愛いんだけどねー。

氷岬神流14歳。実年齢不詳の年増女に、少しだけ、感情を寄せ
る……。

〓 〓

〓 〓

「ローラ。別に心配するようなことでもなかったよ?」

「誰があなたなんかのことを心配したりけるのよ」

僕の心はもうズタボロさ。

「今回のことはなかったことにしけるわよ」

ローラがやれやれと言った表情で憂鬱そうに言う。

「なんで? 子供が被害にあってんだよ?」

そんなペド野郎。僕が一人残らず吹っ飛ばしてやる。

「ローマ正教。十字教三大宗教の中でもさらに上。全世界に20億の教徒を有する超巨大最大勢力たりけるのよ。神流、あなたはこの世界に戦争をもたらしたいと欲するの?」

「はあ、そうなんですか? 氷岬くんは、よく分かりませんよー」

「もう」

あ、可愛い、と思った僕は熟女好きなのか?

いいんだ。絶対に理解者は現れる。

「……そういえば、神流が戦う理由、聞いたこと無きけりね」

「ローラを護るためとか言ったら、笑うか？」

「……爆笑よ」

そんなことを言いながら、ローラは微笑む。

ローラ「スチュアート。イギリス清教最大宗教。

僕を拾ってくれた大恩人。僕を救ってくれた大恩義。

僕は、今の生活に満足してきている。

それは――。

「ローラのお陰……ってね」

シニカルに笑い。

そして僕は、成長する。

第貳夢：僕が戦う理由（後書き）

まさかのヒロインはローラ！？

個人的に悪女女狐大好きです。

凄い年の差であることは変わらんがね！

第参夢：The sneered evil eye talks about

嘲る邪眼は、多くを語る

あれから一年。インデックスの記憶を消去した。

毎年の、楽しくて、愉快な記憶が消えて行く。

毎年訪れる深い悲しみ。毎年訪れる辛い別れ。

けど。僕は知っている。

完全記憶能力が、サヴァン症候群と同じようなものであるならば、記憶の圧迫なんかで、人は死なないということ。

ステイルとアウレオルスは本当にちゃんと探したのか疑いたくなる。

テレビにも、度々とはいかないにしても、時々は出てくるはずだ。

【一度見たものを決して忘れられない】人たちが。

けど、それは能力なんかではなく、脳の以上の一部で、彼らのことごとくはどこか奇怪な人物だ。けど、生きている。

「それらから、統合してみるに……」

死なない。

忘れられない、程度、の能力では、死なない。

科学的見解なので、コッチ側のステイルやアウレオルスが分からなかったのも無理はない……………のかな？

しかし、分かったところでどうなんだ？ という話である。

全ての権限は…………、

「あら？ こんな場所でどうしたりけるの？」

馬鹿で狡猾な、ローラ＝スチュアート。紅茶をすすりながら…………、

「インデックスのことについてだよ」

コイツが…………、

「あら？ 気づいたりけるの？」

全ての…………、

「…………馬鹿。気づいてないよ。最初から知ってる」

…………元凶。

「ふうん。で？ なにかしけるつもりなの？」

まあ…………。

「【首輪】…………人間にすることじゃないよな？」

「“アレ”は十万三千冊の、魔道書の器たるべきモノよ」

「……………アノ娘は、幸せに、ならなくて、させなくていいのか？」

右手を握りしめる。

やろうと思えば、力任せに、首輪なんて壊せると思うよ？

けど――。

「ステイルも神裂さんも、アウレオルスだって……みんな、みんな悲しいんだぞ？」

「――なんのことかしら？」

私は何も知らないと言わんばかりに、ごまかしなく微笑んだ。

「……………もうすぐだな」

もうすぐ、定期的な記憶消去の時間。

ステイルと神裂さんは、隣で見守っているだろう。

土御門は、日本にある学園都市と言うところに潜入スパイをかけているみたいだ。

「それでも、神流は変わらず、私を護ってくれる？」

「……………うん」

戦う理由に、ローラを護るため——ローラの所為だと言った。
イイワケ

なら、ごちゃごちゃと難しいことを考える必要はない。

笑って普通に——、

「……護る」

するとローラはにっこり笑って、

「神流。ところでこの、“けーたい”というのはどつやって使
けるの？」

いつも通り馬鹿口調。

僕もにっこり笑って、

「ケータイ使用禁止」

ケータイを取り上げた。

|| || || ||

それから少しして、インデックスが逃げだした。

その時僕は、

「むう。神の記述、なかなか創るのが難しい……」

色々怪しい物体を手に取りながら、神の記述の創作に没頭してい

た。

あれはある意味——戦うのが楽になりそうだからね。

「氷岬神流ッ！」

こんな風に、僕をフルネームかつ呼び捨て（ほとんどの人に呼び捨てされてる）で呼ぶのは、二人しかいない……多分。

「……どうした？ ステイル、神裂さん」

「インデックスが逃亡しました。すぐに後を追ってください」

二人とも、眼が紅く充血している。

「……僕は、追わないよ」

「「なッ!？」」

その言葉が随分と衝撃的だったらしく、僕に掴みかかってこんなに凄みに凄んでくる。

「確かに。邪眼を使えばインデックスを捕まえるなんて、それこそ息をするくらい簡単だ」

息を吸って吐いてみる。

うん、簡単だ。

「ならば、なぜだッ！」

今にも。今にも魔術を行使せんとばかりに掴みかかってくる。

神裂さんも、2mをこえる日本刀。七天七刀を構える。

「——続けるの？　こんな辛いこと」

「ッ！？」「」

「二人とも。いや、僕だって。アウレオルスだって——一緒に居たい。けど、一緒に居るのが辛い。矛盾してんじゃない」

一緒に居ることを望み、
一緒に居るのときが辛い。

「だったら………だったら、どうしろってんだよッ！！」

神裂さんが吼える。口調も、かなり荒っぽくなる。

「一年周期で記憶を消さないと………死ぬでしょう……」

神裂さんは、その場に泣き崩れる。

知っている。みんながみんな、禁書目録かのじょが記憶を消されるとき、

禁書目録の前では泣かないようにしていることを。かのじよ

そのくらい、知っている。

「ああ。そうですね、死にます」

そう、死ぬ。脳の圧迫からではなく【首輪】によって。

「……任せてみましょうよ。システム神様の奇跡とやらに。かみ禁書目録はと
ストイックそれでも不幸とつても不遇だ。そんな彼女の運命なんて——ハッピーエンド幸せ
以外、認めないっての」

ジェイルオルタナティブ代用可能なんて認めない。

バックノズル時間収斂なんかも認めない。

というより、知ったこつちゃない。

ひとりひとりがオリジナルキャラクター。

ヒロインそんな禁書目録には——

ヒーロー「主人公が、つきものでしょう?。」

……やば。宗教脳になってきているだど?

ローラめ。寝ている時に聖書でも聴かせやがったか？

とりあえず、蜥蜴の乾燥粉末を、ぐるぐるとかき混ぜていたごぼごぼとした紫色のの液体に入れる。

爆発。

はは。バロス。

それから数カ月。

「【我こそは蛇遣い座アスクレピオスの使者なり…その呪わしき命運受け入れし者

者にのみ賜うべきは 毒蛇の牙に秘められし高き天と深き地獄の力なり】」

氷岬の周囲に幻影が出現する。

そして、いつもとは違う呪文。その莫大な力^{エネルギー}は右手とは逆の手。簡単にいえば左手に集約している。

顕現するのは、蛇ではなく、むしろ竜の姿。

「【されば愚かなる者共に鉄槌を打ち下ろせ 荒ぶる神魔の怒りを以て】」

幻影が、幻想に。

幻想が、現実へと変貌する。

その力は天上の神々をも圧倒する力。

神をも殺す、魔の力。

「^{スネークジェノサイド}【蛇殺ッッッ！！！！！！】」

彼がその力の矛先を向けたのは、不穏分子がたむろするそれなりに大きな“教会”。

竜のように唸るその左手が、教会の壁に触れた瞬間、原子同士の結合が緩くなり衝撃を与えると蒸発したかのように霧散霧消。

自信の体積の数十倍の建物を、字に書いたように“跡形もなく”消し去った。

中にいた人たちの中には、女子供も含まれていたようで、ぶるぶると震えている。

それに近づくと、より一層震えだす。

氷岬は「うーん……」と少しだけ悩んで、簡潔に終わらせることを望んだ。

「はい、解散」

それだけ、だった。

周りの人間はきよんとするだけで、どうにも現実が受け止められない。

「うん。もうすぐ必要悪の教会の人間が来ると思うから、それま
ではここを去った方がいいよ」

その一言を言うと、一斉に動き出す。

人数は少なかったようなので、行動は迅速なものだった。

それをスコーンの入った紙袋片手に、ぼーっと見つめる。

今回の彼の任務は【教徒たちを消すこと】。

思いつきり命令違反なのだが、彼には屁理屈という最終兵器があった。

『教会ふっ飛ばしたら、いくね？』

確かに。彼らの根本的な根源は教会にある。

少数宗教だったのだから、そういうこともあるだろう。

彼は確かに、【教徒たちを消した】。

彼らの生き甲斐ともいえる、宗教を、全て粉々に跡形もなく木っ端微塵に吹き飛ばした。

彼らはもう“教徒”ではない。

そんな、ぼーっとしている彼に近づく小さな影が一つ。

「お、おにいちゃん……」

「There is no attribute said to
he younger sister bud to me」

僕に妹萌という属性はないよ、の意味である。

「そ、その……わたしは、これから、どうやって生きて行けばいいんでしょうか？」

小さな少女。特徴としては、紅い目に白髪が特徴だろうか？

「（見たことがあるなあ）」

と、ぼーっとした思考のなかで思い出す。

たしか。この新興宗教の、“主教”だったような気がする。

この容姿ゆえに“神の子”として祭り上げられ、家族も何もかも

奪われた、“主教”。

それにしても、とても幼い。と心の中で思う氷岬。

「どうやって、か……。あれだよ。好きなように生きなさい。うん、それがいい」

「……生き方が、わかりません」

俯いてしまふ白髪少女。

年のころはどのくらいなのだろうか？ そんなことを考えながら少女を見つめる氷岬。

「ふむ。とりあえず、氷岬くんおすすめの、このスコーンを食してみなさい」

「え？ なにあむう！？」

サクッ、フワッ、とろろん、の三段活用。

氷岬も紙袋から新たに一つとりだし、頬張る。

「うん。変わらない美味しさ」

ポケットに手をつ込み、ブルーベリージャムを取り出す。

本人曰く

『ジャムを携帯？ 当たり前なこと聞かないですよ』

らしかった。

それを胸のポケットにある小さなナイフ（これも常備）ですくい取り、塗りつける。

「きみ。名前は？」

「え？」

「名前。名前とは、物や人物に与えられた言葉のことで、それらを識別したり読んだりする際に使われる。名称、あるいは単に名ともいう。意味の説明はこれでいいかな？」

「いや……………ディオ……………」

「うん。イタリア語で、一神（Dio）の意味だね」

「……………どうしようもなく、わたしは、縛られているみたいですわね」

神という名に、自分の自分^{あかし}さえも縛られている。

「そんなことはないよ。そんなくつだらな^{もん}い神^{もん}なんか縛られな
いよ」

ヒトを縛ることができるのは――

「自分、ただだよ」

「……………あの。お名前は？」

「うん。いいよ。僕の名前は氷岬神流。欲深い、浅ましい人間だ」
それでも、神父さんなんだよー？ とやる気のない声を上げる。

「……ひ、ひみさきさん。わたしを……生きさせてください!!」

精一杯、小さな腕を伸ばす。

生き方を知らない少女が、生きたいと願った。

生きたいと願った少女は、笑いたいと願った。

笑いたいと願った少女は、神ではなく、一人の少年に祈った。

生きたい!!

その少年は――

「くすくす。うん、いいね。最高だよ」

何かうれしいことでもあったのか、くすくすと笑い続ける少年。

ちらりと、氷のような瞳が覗く。

刹那、力強い腕が、少女の手ごと抱きしめる。

「一度伸ばされた手を取ったら、二度と離さないって自信はあるよ」

そうして、少年——氷岬神流に、家族ができた。

第参夢：The sneered evil eye talks about

オリキャラが出てきた。

僕ビツクリだね。

主人公設定（前書き）

検索してみたんだ。美堂蛮を……

とりあえず、読んでく dashiya あ

主人公設定

氷岬 神流 (16)

性格は極めて温厚。しかし、一定の条件^{げんかい}を振り切ると、性格が激変。暴力を以って相手を屈服させるまで、気が済まなくなる。自分で『欲深く、浅ましい』人間だと言っているあたり、少しばかり自虐傾向にあるようだ。

見た目は、鴉の濡れ羽のような黒髪に氷のような薄く蒼い瞳。目が覚めるような美人系男子。しかし主人公の性格があれなので4割減。

身長178?。体重63kg。細型。

能力：Get Backersの美堂 蛮+堕天使ルシファーへ従属を誓った産物の黒翼

スネークバイト
・蛇咬

握力200kgを超える力での戦闘。その様が蛇咬に似ていることからの名前。主に右手を使う。使いどころとしては、楽勝レベルの相手に対してである。

アスクレピオス
・蛇遣い座の力

呪文を唱えることで自らの能力を劇的に引き上げる。あらゆる因果を破壊することができる。主に蛇咬と併用する。現れる幻影は大蛇。

【今こそ汝が右手に その呪わしき命運尽き果てるまで 高き銀河より降りたもう蛇遣い座を宿すものなり されば我は求め訴えたり喰らえ その毒蛇の牙を以て】

スネークジェノサイド
・蛇殺

蛇遣い座のものとは異なる呪文を使用する。 現れる幻影は大蛇というより竜。 使うのは左腕。

【我こそは蛇遣い座の使者なり… その呪わしき命運受け入れし者にのみ賜うべきは 毒蛇の牙に秘められし高き天と深き地獄の力なり… されば愚かなる者共に鉄槌を打ち下ろせ 荒らぶる神魔の怒りを以て】

デモンズアーム
・悪魔の腕

蛇遣い座の力により形状を変えた後の右腕。 最初は手が変形するだけに留まるが、力を求めるたびに形状が更に禍々しく変化。 右腕全体が黒い棘のようなものに覆われる。 力は極めて強力で、異能の力をその力で捻じ伏せることが可能。 現に、原作の完全態となった【雷帝】と呼ばれる青年の、世界を消し飛ばす威力の雷撃を物理法則を無視して受け止めた（他にも分子消滅・空間破壊・ブラックホール破壊・魂にも干渉）。
しかし、その強力な暴力の反動で、著しく命を削る。

・天使の腕

氷岬の精神状況によって変わる。彼が墮落^{マイナス}になればなるほど、悪魔の腕が進化していき（力を望むことだけでも進化する）、力の限界を乗り越えようと意志^{プラス}になることで、天使の腕が進化する。発動すると美しい白翼が肩甲骨辺りから顕現する。

・邪眼

相手に一分間の幻影を見せる。制限として、24時間以内に3度まで、さらに同一人物には24時間以内に一回しか使うことができない。しかし、一分間というのもほとんど制限的なものではなく、相手の体感時間は夢の内容によって自由に設定できる。さらに、一度に複数人にかけることができる。

ここから先は、チート過ぎて笑ってしまいます。というより、この作品で使いどころがあるのかどうかという設定です。ちなみに、美

堂 蛮は主人公最強スレというところで、1位とほぼ同じ力を有しております（全能の壁）。それを見てびっくりしたのは、孫悟空が載っていなかったということでした。

腕の硬度：モース高度で金剛石を10とすると8〜9

ダイヤモンド

握力：本作では簡略化して200kgとしているが、正確に言うとなんて

蛇咬の威力：人間の致死域エネルギーを2tの車が時速100km/hで衝突したとすると8万J。氷峠はその150倍、およそ1360万J以上ある。

通常状態の攻撃速度：0.1秒以下につき12回攻撃が可能

悪魔の腕解放状態：0.1秒以下につき一撃ごとに10の攻撃オプションを組み入れて300回攻撃が可能。つまり、1秒で3万回以上攻撃が可能である。

バトルセンス：美堂 蛮のセンスをそのまま引き継いでいるため、天衣無縫。例を上げるとするなら、多くの敵が混在する中で多角的に相手の行動を先読みし、手を触れることなく自滅に追いやるなど。右ストレート：衝撃が熱に転化され周囲を崩壊させる衝撃波が発生しあたると蒸発するレベル。

もう、以下略。

主人公設定（後書き）

思わずそのチートっぷりに笑った。

とりあえず、下半分は、使つかどうかわからない設定です

僕的最強順位

美堂蛮 天野銀次

（越えられない壁）

神とかその他諸々

です。

しかし、驚いたことに、氷岬が普通なので、普通な結果になっています

第死夢：軽く

「ひ、ひみさきさん。起きてくだしゃあ……」

「む……むう……ス、スコーンが、スコーンがああ……」

ディオにゆっさゆっさと揺さぶられながら、恐らくスコーンに襲われるという夢を見てうなされている氷岬。

若干10歳のディオに起こされると言う醜態をさらしている氷岬。

しかし、だ……

「……お、おはよーの、キ、キ、キキキ、キキキキ、キッシュとか……あう」

みなさんご存知のように、15歳以下はロリータと呼ばれる。さらに、10歳以下の幼女ともいわれる年齢の少女を襲うと、ペド野郎と罵られるのである。

とある科学の方向操作の人は、あるきっかけの所為でアクセロリータと呼ばれるようになるのだが、まあ閑話である。

真っ赤な顔で、どんどん距離を狭める。

瞬間、氷岬が目を閉じたまま起き上がる。

ごっつん、と鈍い音を上げてぶつかる頭同士。ディオは「あう」と声を上げ、氷岬は「げふ」と聞くに堪えない声を上げる。

そして静止。

「……………うにゅ？」

氷岬は寝惚けていた。寝惚けていた上に、状況はかなり複雑。

何故幼女が僕の下で呻いている？

そう。あの衝撃で、ディオを押し倒しているペド野郎の図が出来上がっているのである！

「（あれ？ 涙目？ あれ？ うめき声？ あれ？ 乱れる服装？）」

ARE？

「神流。とってもいい情報があり……………け……………る」

ガチャリ、という音とともに開けられるドア。そこから氷岬の部屋に入ってきたのは、イギリス清教最大主教、ローラ＝スチュアートその人である。

15歳の少年が、淡い気持ちを抱いている

——オバサン、である。

それが、氷岬とディオがなまめかしく絡み合っている（ように見える）ところを目撃。

ローラは口をパクパクとさせて、顔を赤くさせたのちに、何かを悟ったような表情になる。

「……神流。やっぱり、若いおなごが、好みたりけるのね」

さーっと、血の気が引くような思いをする氷岬。

それこそ、幼女を襲っている場面を見られたかのような……まさに、その場面である。

「………うに？ 僕様ちゃんには、分からないんだよ」

とりあえず、違うキャラになってみた。

「………手」

ローラが、ぽつりとつぶやいた。

おそろおそろ、手もとの感触を確かめる。ローラのことだから氷岬が気付かないうちに腕を吹き飛ばしている可能性だってある。

「（………うん。微妙に触り心地の良い………むにゅ？）」

手元を見る氷岬。

もみもみ。

テヘ

爆発。

はは、バロス……ぐへえ。

||

||

||

||

「コンピ」「コンピ」「コンピ」……「コンピ」

あゝ、神よ。何故、僕にこのような試練を。

氷岬は邪教徒です。神様信仰者ではありません。ルシファー様一筋でございます。

何故、ロリコンのレツテルを貼られる？

それならば、ステイルやアウレオルスだって……。

あ、ステイルは14歳か……。アウレオルスは……。アウトだな。

「そ、その……勝手にお部屋に入って、こ、こんなことになっ
て……ほ、本当に、すみませんッ!」

土下座せんとばかりの勢いで頭を下げ………つて！？ 床に頭を打ち付けている！？

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな

「なに？ 狙ってるの？ ツツコミ待ち？」

「つ、つつこみ……あう」

急に顔を真っ赤にしてしまうディオ。

あれー？ どうしたんですかー？ と、氷岬は顔を真っ赤にしているディオちゃんに、額に汗をにじませながら尋ねます。

「……下種」「……ペド野郎」「……鬼畜」

ぐっぐう！？ シスターその1、その2、その3！ 今さっきからうるさい！

確かにもみもみしたけど……皮だけだったもんぐへえッ！？

「な、なんじゃこりゃあ……」

腹にナイフが刺さっている？ いや。なんで？

ぼたぼたと滴り落ちる紅い液体。

どろり、としたたる――

「禁句、なんですよ？」

「……まさかのヤンデレ。はは、バロス」

――ジャムだった。

焦った。今度こそシリーズ終了かと。

いや、何でもないです。

「……はッ！ わ、わたし、なんてことをッ！」

「イービアルザン
邪眼開眼！……！」

見せたのは夢。夢であったという夢。例えるのなら、胡蝶の夢という奴だろうか？

「……ん？」

となるわけで。

この話はあんまりしたくないので略。

個人的にヤンデレにはものすごく怖い思い出があるのですたい。
はい。

『神流クンはボクのどの辺が好き？ え？ 全部？ やだ、嬉しいんですけど。けどね、神流クン……昨日ボクの夢の中で、他の女とイチヤイチャしてたよ？ 三組の萌亞さんだったっけ？ あの子も、神流クンに色目使ってきたよう？ そうだったよね？ ね？ あんな可愛子ぶってる雌豚にユークワクされるような神流クンじゃないと思うけど……一応手をつっておこうと思うんだけど、どうかな？ 大丈夫大丈夫、ちょっとチョンパするだけだから。え？ そのハサミはどーしたのかって？ やだなあ、学生なんだからハサミぐらい持つてるよう。え？ ナニに使うのかって？ やだなあ、神流クンの彼女さんなんだから、邪魔者は刈りとらなくちゃ、でしょ？』

………僕の彼女だった娘の、一言でした。

そのあと、僕は必死で止めた。………まさに“必死”で。

一日百通。メールが届く。

一日180分。電話の時間をとる。

寝るときは、プレゼントのモノを抱きしめて寝る。

一日10回。キスをしよう。

休日は必ずデートをしよう。

まあ、初めての彼女さんだったから、それが普通だと思っていた。

なので、うん。笑いながら過ごせた。

ネットで『ヤンデレ』の単語を見た瞬間、脂汗が噴き出してきた。

で、公園で彼女さんとデート中、そして氷岬くんは今に至ると。

はは。オラ、ガックブルすんぞお!!

閑話休題。

「ん。わたし、居眠りしてたみたいです……」

「だね」

覚醒しないことを切に願う。

「で？ ローラ＝スチュアート様は、本日はどのような御用件で
「ございましょうか？」

「うふ。心配せずとも、みんなに言いふらしたりせぬから、安心しけりなのよ」

「せっかく閑話で忘れさせたのに、掘り返すな」

せっかく読者のみなさんに忘れてもらえたと思ったのに。

「今日の用件は……」

真剣な表情になるローラ。僕も思わず身構える。

「彼女、禁書目録を連れ返してこよなのよ」

………今のは命令形、『来よ』なのだろうか？

「あとちょっとで、一年。それまでに連れ返してこれなき時は…

…」

——彼女、死にけるわよ。と、まっすぐに言い放った。

「ステイルと神裂さんは？」

「既に行っておるわよ」

どこに？ という僕の質問に対して

「日本。学園都市、と呼ばれるところなの」

……ふう。

「……主人公は、日本にあり、か」

「どう？ 行ってくれる？」

……愚問だね。

「——軽く、楽勝してやんよ」

それから。物語は

開始^{マイナス}以前から、始まり^{ゼロ}へと、そして、終局^{プラス}へ

動き出す

第死夢：軽く（後書き）

かんそうやらなんやら、お待ちしております

閑話第出夢：□ ■ なんだから、だよね

地獄。そこは人間の魂がそこに存在するだけで、正気を保ってられない。

ただ例外として、数万年前に正気を保ったまま、堕天使ルシファ―に魅入られた少年がいるのだが。

その地獄に、今日も今日とて、何万もの人間が落ちてくる。

「はあ。つまらんなあ」

その地獄の最下層。氷の椅子、常人が座るだけで、魂まで凍てつき、砕け散る。

そこに座すのは、黒髪の、美の塊ともいえる女性。それが退屈そうに罪人が裁かれるのをその場からすべてみていた。

ここで魂が限界まで擦りきられた魂は、消滅する直前に天界へと送られる。

所謂、魂の調整所なのだ。

「暇なんだ。最近氷岬の奴は戦闘とかあんまりしないし……せっかくおまけでつけてやった【堕天使の力】は使わんし……念ずるだけで使えるのになあ」

これならいつそのこと性奴隷にしたほうが、やりがいがあったなあ。と真剣に後悔する。

「あの……ルシファー様……とてつもなく言いにくいのですが……」

そんな地獄に、また異端が現れたようであつた。

「どうした？ また人間が正気を保っていたりするのか？」

「……はい」

ルシファーは、悪魔、バアルの横に居る人物を見る。

銀と白。まず目につくのは白と銀の肩より少し上の髪。

金と銀。次に目につくのは金と銀の北欧でイビルアイと呼ばれる瞳。

それが虚ろな目をして、虚空をただただ見つめている。

いや。虚空を見つめているのではない。そこに創りだした自分だけの何かを見つめている。

「ふん。氷岬とはまた、違った感じだなあ……」

「ヒミ、サキ………？ 神流クン？ 神流クン神流クン神流クン神流クン神流クン神流クン神流クン神流クン、神流クンのこと知ってるの？ ねえ、知ってるの？ 答えた方がいいんだよ？」

氷岬という単語に異常反応を示す、少女。

「ふむ。なんだ？ コレは」

「はい。調べてみたところ、あの氷岬神流の、人間で言う恋人同士なるものだったようで。この少女も、氷岬神流のあとを追って、数日後にトラックにひかれて死んだそうです」

「ふん。病的だな」

ルシファーが氷の椅子から立ち上がる。長い髪を地面につけないようにしながら、少女へと歩み寄る。それだけで、地獄全体の存在が打ち震える。

「どうした？ 神流くんばかりでは、分からんぞ？ 小娘」

いまだに氷岬の名を呟き続ける少女。その少女の髪の毛を掴んで顔を近づける。

「会いたい。会いたいよ、神流くん。神流くん」

「ふむ。それだけか？ 会わせてやってもよいぞ？ 私と主従の関係を結ぶのならな」

「手段は選ばない。嘘だったらあなたも殺す。殺す殺す。嘘本当？」

「私に質問するな。□るぞ」

一瞬。魂が消滅しかけた少女。一つだけ呻き声を上げるが表情は变えず、いまだ見つめるのは目の前の現象ではなく、一人の少年。

「望め。そうすれば、全てを手に入れさせてやろう」

不可視の力が少女の体を虚空へと持ち上げる。まるで体全体を何かに包まれているような感覚が少女の体に伝わる。

「言え。お前の望みはなんだ？」

一方的に、現象から少女へと、質問という名の命令が下される。

——言え。

「——会いたい……神流クンに、会いたい！！！」

虚ろな目をした少女に、初めて、生気が宿った。

まるで、人生を語るかのように。まるで、夢を語るかのように。

まるで——幸せな自分を語るように。

少女は言った。

少女の人生を、夢を、幸せを——全部与えてくれた、少年に会いたいと。

「氷岬神流というのは、あれだな、俗に言う女ったらしという奴だな」

「いいからさっさとシロこの屑」

「とりあえず、幼稚なお前に、人間界で言う“タカイタカイ”とやらをしてやろう」

瞬間。体が上空へ急加速される。

この地獄にGがあるかどうか分からないが、この加速は明らかにおかしい。重力などまるで気にした様子もなく、目測でも、上空何万メートルもの高さへと放り投げられている。

悲鳴が出そうになるが、それをなんとか飲み込み、いまだ上昇を続ける自分の体を自然に任せる。

しかし、思い至ってしまった。上昇したというのなら、自分が地面に立っていたという事実から見るに、落下もあるということだ。

それも、数万メートル上空からの落下。恐怖も一塩だろう。

[illegible]

そうして落下を開始したカラダ。

なんだか、トリさんになった気分だった。

一瞬のまばたきのうち、目を開けて横を見ると、現象が横に

いるのが見て取れた少女。

「さてさて。契約と行こうか？　まず名前からだ」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろうが年増アアアアアアアアアアアア！！？」

「今度は地面と時限崩壊レベルの速度で激突してみるか？　おそらく魂は地獄の土の養分と化すだろうな」

「早く言ってくださああああああああああああああああああああああ
あああい！！！！」

現象の暴拳によりシリアスな場面にちっとも感じられないのは不思議だ。

「名前からだ。言え」

「安瀬^{あぜ} 狐雕^{こわし}です！？」

「急がんでも、あと一分は大丈夫なんだから、暴れるな」

一分という言葉に更にパニックになる少女——安瀬。

「『汝、我に永遠の従属を誓うか？』」

「誓いますうううう！！！！」

一つ。

「そら、念じる。あと三秒だ」

——トリさんッ!!

羽ばたく。世界を壊せる力を内包した、力の塊である翼が、既に音速を超えたであろう落下速度に負けず、羽ばたく。

「……………飛んでる？」

「次は能力だ。選べ。好きな能力でいいぞ」

当たり前だと言わんばかりに、次の瞬間には現象は氷の椅子に座っていた。

息をするかのごとく、当たり前のように。

しかし。力を得た彼女がしたことは、攻撃。翼を最大限に生かした翼撃。

次元を切り裂く力が、現象——墮天使ルシファーへと襲いかかる。

しかし、現象はそれでも眉一つ動かさず、自らも翼を顕現させた。

しかし、それは、翼と認識するには、あまりにも時間のかかり過ぎる、もはや翼の端は地平線の向こうに消えるほどの、超絶さ。

「どうした？ まさか、勝てる、とも思ったのか？ 可哀想な奴だな。私がお前に渡した力は、私の1/1000000000000000000だぞ？」

まあ、オイタできぬよう、少し痛めつけるとしようか。

翼が、ほんの少し動いたような気がした。

そう、その翼の巨大さからしたら、安瀬を吹き飛ばす程度の距離、ほんの少しだったに違いない。

瞬間、安瀬は自分が消えたことを理解した。理解させられた。

この現象には、逆らってはいけないことを。

死ぬことが怖くなくても、ただ純粹な本能だけが、“コレ”には逆らうなど言っている。

「——うえ？」

「さて、能力を選ぶ」

気づけば現象は、氷の椅子に座していた。

黒い長髪の間からは、挑発的な瞳が安瀬を射抜く。

しかし、睨み返すこともできない。

「……神流クンと、真逆でいい」

「……………真逆……………【雷帝】か。まあ、素人があの世界に行くには、それくらいは必要かもしれんな」

パチリ、と雷が走ると、莫大な力が安瀬の中に入力される。

「ほら。さつさと行って、私を楽しませろ。お前のニブチン彼氏は、まったくもって盛り上がり性に欠ける。やろうと思えば一瞬で物語を瓦解させることもできると言っのに」

おら。さつさといけ。と手をシッシツとする現象。

「……………神流クン。ボクのこと、今でも、愛シテル？」

彼女は、劣性の塊。

紫外線を避けるための色素は消えうせ髪の毛は白銀。瞳すらもイビルアイ。

なにより。なにより、思考形態は、劣性を飛び越して劣悪。

感謝に対して悪意を返し、

好意に対して殺意を振りまく。

たちが悪いのは――

「クスクス。当たり前だよねそんなの。心配したボクなんてどぶに捨てるから、許してよね神流くん」

思い込みが激しいということである。

そんな彼女が行くのは、魑魅魍魎が跋扈する世界ではなく、科学と魔術が交差する世界でもない。

少年、氷岬神流のもとへ。

第護夢：自称、貧弱脆弱虚弱墮弱最弱の属性を持つ男（前書き）

遅ればせながら、すみません

第護夢：自称、貧弱脆弱虚弱墮弱最弱の属性を持つ男

「さて、久しぶりの日本、楽しむぞ！」

とはいかず。

「ひ、ひみさきさん。わたしも行っていていいですか？」

というなんかヤバめの雰囲気になってしまい、

ここで快く連れて行けば、ロリペドフィン將軍の称号レットルを無残にも貼られ。

断ると、今にも泣き出しそうなこの少女は、99.9%の確率で泣き出し、幼女を泣かせて喜ぶロリペドフィン將軍の称号を無残にも貼られるだろう。

そう、僕には答えが分からなかった。

この、絶対的不条理な選択肢に対して！！

「デイオちゃんに行くべからずなのよ。教会に入るにはそれなりの行程を通してからでなければなのよ。それに、まだ教会に入っていないものを私の権限で学園都市にはいらせることは出来ずなの」

ローラが、ローラが！ 普通のことを言っている！？

ではなく。

渡りに船。けど、三途の川へ出航、みたいなのっ！

『五行機関には許可をとりけるけど、十分注意したりなのよ？』

『ローラも、ディオに変なこと覚えさせるなよ。特に意味の分からん宗教のこととか』

『あら。私がいつ変なことをしけりなの？』

『存在』

『あう』

うん。心配はしてくれているらしかった。

けどま、何とかなるとは思いますよー。

神の記述もルーンの天才であるステイルに手を借りて結構前に、本当に何とか完成したし。

その時のステイル。

『なるほど……こういう使い方もあるわけだね』

その横で僕は湧いてくるだけの単語（知識はあっても知恵はない）に、？ を浮かべるだけだった。

「『当機は——』」

さてと。少しだけ寝ようかな？

〃 〃

〃 〃

「……………SFだ」

氷岬は学園都市内部に入った瞬間、この言葉を言い放った。まあ、正規のルートではないのだが。

「す、すげー。なんだよなんですかこれは。なんで飛行船にモニターが？ 風力発電が街中に？ あのドラム缶みたいなのはなんだ？ 11次元って？ っていうか学生ばかり！ やつべ、興奮してきた……………」

と、もはや何が言いたいのがよく分からない有様になっていた。

それもそのはずである。

学園都市が他の場所と比べて技術的に20年は先を行っているのも、その原因ではある。しかし、氷岬自身が科学とは縁遠い世界で暮らしていたせいでもあるのだろう。

しかし、彼がここを訪れたのは観光の為でもなければ、友達の家遊びに来たわけでもない。

「よし、ディオにお土産を……………ローラにも買わないとなんかかれそうだな」

いや、どうなのだろうか？

彼にとっては禁書目録かのじょを捕まえることぐらい、お土産を選ぶこと

より簡単なのではないだろうか？

しばしの思考。

しかし、彼の右目に何かが映った。

「？ 銀行強盗？」

そう。彼の右目が映したのは、銀行と思われるシャッターが何かの爆発によって吹っ飛んだ光景だった。

そこから出てきたのは、余程捕まらない自信があるのか、目差し帽すら被っていない、晒し顔の三人の男だった。

「うーん、どうなんだろう？ 放置してもいいものか？ ローラが言うにはあんまり目立った行動は慎んだ方がいいらしいし」

科学と魔術。

決して相容れることのない双極。

それは天と地ほどの違いがありながら、鏡で映したように相似な存在。

その片割れである魔術サイドの氷岬は、科学サイドである学園都市で勝手に行動していいものなのか悩む。

しかし。その必要など微塵も必要無かったようだった。

茶髪のツインテール、氷岬よりも1、2歳年下の女の子が銀行強

盗に向かってゆく。

危ない！　と思わず体が動きそうになる氷岬。

予感は的中。リーダー格と思しき男性がステイルの炎魔術に似た攻撃を繰り出した。

——これが能力か。

しかしその炎はツインテールの女の子に当たることなく、否、本当なら直撃していただろう。

だが、その炎は彼女が“いた”場所を焼く。

しかし、もう彼女はその場にはいない。

これが【能力】であることにまだ氷岬は気づいていなかった。

それから、すぐさま現れた少女にノックダウンさせられる男。

「どっけええええええええええッッ！」

気がつけば、あの三人組のうちの一人の男が車に乗って氷岬の方へと特攻してきた。

「お前がどけ」

氷岬の蛇咬が車体の前方側面にぶち当たる。かなり手加減はしているみたいだが、車体は大きく五回転半。氷岬とは反対の方向を向く。

息もつかせず、車が急発進。

刹那、オレンジ色の光が一条、道路を撃ち抜く。

氷岬は笑って――宙を舞った。

「わっふううううううぐへえッ!？」

ああ、二度目の空中飛行、と馬鹿なことを考えていたせいで受け身は取れなかったが、

「……おお！ 頭から落ちたのに死んでいないだと!？ これがギャグ補正と言うものか！」

新鮮なものを感じた気がした。

「――アンタ、誰よ？」

「……自称、貧弱脆弱虚弱墮弱最弱の属性を持つ男ですはい」

わざとらしく目に涙を浮かべて、車をぶん殴った右手を痛そうに左手で押さえる氷岬。チラッチラッ、と茶髪のニーソ中学生の様子を窺っているあたり、演技は完璧だと思っているのだろう。

そんなはずはないのだが。

こうして、邪眼と超電磁砲^{レールガン}は、ある種、最悪の形で出会った。

第護夢：自称、貧弱脆弱虚弱墮弱最弱の属性を持つ男（後書き）

感想ご批判ご指摘、お待ちしております

第麓夢：久々の戦闘キター……嬉しくないんですけどねッ！（前書き）

久々の登場。そしてごめんなさい、とメグルはメグルは謝ってみたい。

ささっと、物陰に隠れながらリアクションをうかがっているんだぞ、ってメグルはメグルはちよっと許してくれるかどうかかわらないあなたにおびえてみる。

メグルはメグルは、とりあえず逆上緩和用に土下座を試みたり。

大分g d g dでした。

ではどうぞ。

第麓夢：久々の戦闘キター……嬉しくないんですけどねッ！

「で？ アンタはどこかの学校に通ってる高校生、ってことかしら」

「そーそー。あ、これうまうま」

「あ、氷岬さん。取らないでください」

「知ってるか？ この世界は弱肉強食なんだぜ」

僕はあれから、なんだか、すごいびーむとどこでもドアの女の子に拘束されて（ある種嬉しい状況）屋外で昼食ということになった。

うまうま。このクレープうまうま。なァ！？ ちょ、髪が長い子！ それは僕のだったりするかも！！

「知ってます？ この世界は弱肉強食なんですよ？」

……くふふ。よく言った！！ 銀行強盗に立ち向かったその勇氣に免じてって、ああああああああ！！ それは僕が取っておい
たやつなのに！

「で？ 学生証とか持ってますの？」

「ギクリ」

せっかくのワイワイガヤガヤムード台無しなことをいうツインテ

ールの女の子。

いや、それを言っちゃあだめだと思うのは僕だけかな。人には事情というものがあってだね？

まあいい。嘘をつこう。

「家に忘れたよ」

「初春。データ照合しなさい」

「えー？ まだ氷岬さんが買ってくれたの残ってますよー？」

「いいからなさいですの」

上司権限？ 先輩権限？

そんな命令に従い仕方がなさそうにノートパソコンを広げだす初春と呼ばれた少女。髪につけてある花の髪飾りがチャームポイントだろうと予測！

ではなく、そんなことされたら僕一卷の終わりだよ。ローラが言うには、全ての生徒が登録しているバンクというものがあって、嘘を言った僕にはそこにデータがあるはず無い。

ちょっとため息。思っただよね。最近、このスキルを無駄に使っているような気がするんだよね。使う機会がないって言うのもなんだけど。

僕のデータが開かれる、直前に、

「ヴえつくしょんッ!？」

「のわー!？」

初春さんとやら、リアクションを取ってくれたのは貴女だけです。よ。すごくうれしいです。

けどま、みんなこっちを見^みたし、剣呑剣呑。意味が違^{ちが}う気がするけどね。

「えつとですねー、あ、ありました。氷岬 神流、^{ストレングス}身体強化のレベル4です」

「レベル4？ なるほど、それで片手で車を薙ぎ倒してたわけね。レベル5だったらどうなんのよって話だけどね」

「無い話をしてても意味がないよ。さて、と。そろそろ僕は失礼させてもらうとするよ。中学生の皆さん」

よっこいせつと腰を上げる。お腹もそれなりに満たされた。けどやっぱりスコーンが欲しいな。

今度材料勝って自分で食べよう。ふふふ、ローラめ。見てなさい、氷岬くん特製のスペシャルスコーンでスマシタお顔を思いっきり綻ばせてやる！

そして僕は、年下の女の子たちにカッコいい後ろ姿を見せて立ち去「ちよつと待ちなさいよアンタ」……嫌な予感しかない。

これは、なんのフラグだ？ 恋愛フラグは立てた覚えはないぞ。そんなこと無意識でできる奴なんてこの世に居ないだろ。います。

もしかしたら、死亡フラグ？ 待ちなさいよアンタ。そう言われるが僕は待たなかった。なので後ろからズガン！ とオレンジのビームを喰らわされるって寸法か。

そんなフラグは氷岬くんが壊して差し上げますのよーっ！！

「レベル4……レベル4ねえ。よし、アンタ。アタシと勝負しなさい」

……………戦闘フラグだったらしい。

|| || || ||

「一言だけ言わせてもらう。絶対に理不尽だーっ！」

「大丈夫ですの。氷岬さんとやら。ここはお姉様のセクスイーでキュートな胸を借りるつもりで頑張ってくださいですの。黒子はその凛々しいお姿を脳と写真に焼き付けますわ！」

ぐへへ、という変態的な笑みをこぼすツインテールの女子中学生。白井黒子は、一眼レフのカメラ（どこから出したおい）を構えている。

「一大能力者（レベル4）と一超能力者（レベル5）の戦いですかー。左天さん！ 滅多に見られるものじゃないですよ」

「いや、そこは危機感持とうよ初春……」

そんな観客が二名。頭に花飾りをつけた初春飾利と黒い長髪と快活そうな雰囲気を持つている左天涙子。

そして、そんな彼女たちの視線が注ぎこまれるのは、このお二人。

「ねーねー。僕様ちゃんには何が何だか分からないんだよー？
いーちゃん呼ぼうかな。潤ちゃんでもいつか。いや、ここは仲間を
呼んだ方がいいかも」

全く違う小説^{せかい}ヘトランスしている黒髪の少年、氷岬神流。巻き込まれるのは、不幸だとかではなく、圧倒的に不条理な理不尽だ。

「ようしっ！ 私の本気、見せてあげる！」

見せなくてよろしいっ！ と氷岬は全力で叫ぶ。

そんなことを言いながらビリビリと青い電気を走らせているのは、
常盤台中学のエース、超電磁砲^{レールガン}の御坂美琴。

氷岬の知識としての情報が脳裏を駆け巡る。レールガン、という
軍用兵器の知識が。

レールガンとは物体を電磁誘導によって撃ち出す装置である。本来は数万アンペアなどを必要し、充電だけでも数分はかかり軍用化はされていない。いるのは漫画や小説だけのお話だ。

しかし、見た。目の前の少女は、たしかにそれを己の身一つで体現して見せた。

そんなモノ通常状態シラフで直撃させられたら骨すら残らない。

（だからって、アレを解放するのはなあ……）

氷岬の言うアレとは、もちろん悪魔の腕やら天使の腕のことである。

アレを解放すれば、たかがレールガン程度、デコピンを放つ気軽さで薙ぎ払えるだろう。そしてその衝撃波はそこら辺にあるビルを倒壊させ、学園都市に謎の侵入者現る、という見出しが出るのは間違いがなかった。

それ以前に、一般人、それも科学サイドの人間に魔術？ の一端を見せるのはどうかとも思う。

寿命が縮まる、というのもあるが。

とにかく、残された選択肢は一つ。

この無駄に戦闘能力の高い体で、勝つ負けるではなく、とりあえず生き残ること。それが必須条件だ。

ともすれば、まず、

「まあ、待とうぜ。無駄な争いは無益な血しか流れないんだぜ
きら〜ん」

「左天さん、私、きら〜んって自分で言ってる人初めて見ましたよー！」

「わ、私も私も！ さあ、ここから涙子がお送りする、氷岬神流はどれだけイタイ言葉を放つかコンテスト！ 盛り上がってまいりました！」

「いいから！ さつさとお姉様の凜々しきお姿を！」

「うつさい黙れ百合女！」

とりあえず荒ぶる気持ちを抑えつけるために深呼吸をする氷岬。

魔術サイドでは、こんな喧嘩を吹っ掛けられたのは最初の2、3年だ。あとはよほどのバカでない限り、こんなバカな真似はしてこない。

バカ以外にも、恐ろしく強い奴とかがいたけどね、と情けなく笑う。

「……って、僕にはこんなことをしている暇などはないのでございます。禁書目録サーンが、死んじやいそうだったのに」

「ねえ、アンタ。もしかして、私をナメてんの？」

いつの間にか額に青筋を浮かべ、体にまわりつかせている電氣量も冗談ではすまされないほどの量になっている。

「……中学生の体を舐める奴はロリコンと言われててね。生憎興味がないわけじゃあないんだけど、こう、普通の大きさつてのも」

そこまで言うと、氷岬の顔横数センチのところを雷撃の槍が通り過ぎていた。空気中に残留した電氣が耳元でバリバリと音を散らす。

「——フツザケてんじゃないわよアンタあああああああッ——」

襲い来るのは雷撃の槍。それも前方からの波の様な。

多分、電流は流していないだろうが、存外、氷岬は痛いのは嫌いだっただ。

そんな雷撃の波を前にして、微動だにしない。出来ないのではなく、しない。

たしかに、この少女はこの学園都市で7人しかいない超能力者の一人、それも第三位に位づけられているほどの人物だ。

それゆえに、多くの闇を抱えてきたし、それを薙ぎ払うためにそれなりの戦闘は積んできただろう。

だが、それでも甘い。甘過ぎて胸やけがしそうなほど甘い。

不意を打つなら一撃で。声を出さずに静かに。

一撃で決められなかった時点で、実力など関係ない。

光速で飛来する雷撃の槍の前に、氷岬は力を込めて腕を薙いだ。そこに、真空が生み出される。

電気とは、通常大気中より、真空の方を流れやすい。流れやすいと言っただけで、全てがそちらに向かうというわけではないだろうが、少しぐらいは乱せるだろう。

ここまでコンマの後ろにゼロを何十何百と並べた程度の攻防。

直後とも言えぬまたたきの後、氷岬が腕を振るった地点を中心に烈風が吹き荒れる。

グッ！？ と御坂が身構え、顔を覆った。

自分が起こすレールガンの余波にも匹敵しそうなぐらいの烈風が彼女を襲う。

それも数瞬のうち。まだ時計の秒針はピクリとも動いていない程度の攻防。

そして、動き始めたときには、終わっていた。

御坂の首筋に、氷のように冷たい掌があてられる。まるで、毒蛇の牙のような冷酷さを以って、こう告げる。

「——ほら、一回死んだぞ？」

その声に反応してそちらに雷撃を放つ。バリバリと音を放ちながら大気を駆け巡り、氷岬に襲いかかろうとする。

だが、御坂が攻撃を放った時には、もうすでにそこには人影はない。

バッと顔をそちらに向ける。

「ほら、今度は頸動脈だ」

今度は自分の喉元に、無視をも殺さないような優しい手つきで、毒蛇の牙があてられる。

御坂は、その学園都市第三位の頭脳を以ってして、その行動の意味するところを、痛いほどよく理解した。

軽く、楽勝されている、と。

蛇に睨まれた蛙、どころではない。

例えば、自分の力がとても強大なものだと仮定する。それに敵うものはそうそうおらず、自分は胸を張って大手を振って街を歩いている（別に御坂はそんなことはしないが）。

ともすれば、今の状況。これが意味するところは至極簡単。

自分以上の強者が、歩いているだけだ。怯える自分をしり目に、特に気にした様子もなく、欠伸でもかきながら街中を歩くように。

完全に、ナメられている。

そして、見下すだけの実力が、コイツにはある。ともすれば、学園都市第一位や第二位のような。

そんな強者はそんなことは知ってか知らずか、飄々とした声色で、
「君が負けた理由、教えてあげよつか？ それは、君が人間だからだよ」

首筋に手を当てたまま、自分より年上の男子は特に勝ち誇った様子もなく、ただ淡々と戦後評価を下していく。

「ようするに、君が『攻撃をおこなう』って意識は君のその力ツシコソーナ脳味噌の中で行われてるわけ。だったら話は至極簡単、単純明快。――脳の電気信号が送られる前に、行動をこっちが起こせばいい」

ようするに、この男が言っているのは。

指を横に一ミリ動かす前に、百メートル走を完走する、といったものだった。

自分達の能力、というものはどれだけ人外染みた威力を持っていたても、それを発動させているのは精々脳味噌の中を駆け巡っている電気信号。速度的にも光速には遥かに及ばない。

その演算行動を起こす前に、自分を叩かれてしまったら、それで終わりだ。

そして、目の前の男は一言。ニッコリ笑って、

「勝負つてのは、自分の能力の高さより相性が問題なんだ、っていうのを、分かっていたただけたかな？」

常盤台のおじょーさん。そう言って、後ろ背に手を振りながら飄々と、その場を去った。

〃 〃

〃 〃

「とはいっても」

いやー、怖かった怖かった。まさにチキンレースだった。

電気つてのは近くのものに飛来するからね。あえて近づけて、自分が移動したときの真空中で雷撃を乱した。なんて超理論！ 恐ろしい子！？

「電子つてのはたしかに光速と同じ速さで伝わるけど……まあ、速度的な問題ではなく、ところてん方式といえますか。まあ、いいや」

あれだよな。空気にも電気抵抗あり、みたいな感じかな。

そもそも！ 質量をもった電子が光速なんて速度で物質にぶつかったり、ましてや地球にぶつかったりしたらやばい。全部粉々に吹っ飛ぶし。

とある有名な例。オレのこーもんからうん●が光速で射出されたら？ という奴。

それはやばい。お前のうん●で地球がやばい。

まあ、この世界は超理論が超適当に起きそうな世界だからなあ。魔術あるし。

どうにかなってどうにかなってるんでしょう。氷岬くんはこれ以上のメタはやめておこう。

さーってと、

「禁書目録は、どこだっろなー♪」

第麓夢：久々の戦闘キター……嬉しくないんですけどねッ！（後書き）

いつえーいつ！ 超理論、超理論、超理論、超理論、サイコー！
ではないですごめんなさい。

この解釈は作者の廻がウィキを見ながら拡大解釈したものです。よ
うするに、屁理屈というものです。

大好きだよ、屁理屈さん！

では、ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

とりあえず、御坂にフラグを建てるのは、ツンツン頭のおにーちや
んの役目なんだよ、てメグルはメグルは確認を取ってみたいっ！

廻はカイと読みます。もう一度、廻はカイと読みます。もう一度
ry

第死地夢：学園都市第一位との邂逅とか誰が望んだんだよクソ野郎（前書き）

すみません。

とある魔術の禁書目録全巻買い集めて読み終わるのに時間がかかりすぎました。

一応は全部読んだので、執筆再開と逝きたいと思います。
字が違う？ あってます。

では、どうぞ。

第死地夢：学園都市第一位との邂逅とか誰が望んだんだよクソ野郎

「ローラ、緊急事態が発生しました」

『どうしたりけるの！？』

とある路地裏でビルの壁に背をもたれさせながら通話をする。その顔はものすごく真剣だ。

「実は……」

『実は……？』

「……………今、最強の能力者とやりに絡まれてる」

ぷちっ。

そんな面白可笑しい効果音を上げて通話が切られた。

ツーツー、と空しい音を上げながらその存在を示している携帯電話を見つめながら、氷岬はため息をついた。

「……………コーヒー買ってあげるから、見逃してくれませんか？」

「ンじゃ、いっちょオ、殺戮の時間だア！！」

命をかけた、鬼ごっこが始まった。

〓 〓

〓 〓

とある列車の操車場。そこは昼間から激戦区となっていた。

時速数百キロで飛んでくる鉄骨を避けながら、氷岬はため息をついた。

「勝てないだろ、いや、勝てないだろ！！ 悪魔の腕使えば何とかなるかもしれないけど、僕はアレを使ったら負けだと思ってるんでね！！」

「アヒヤハッ！ 誰がモヤシだクソ野郎がアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

歪んだような白さを持つ少年は、氷のような少年の後ろを凄まじいスピードで追いかけて回す。

地面に転がる砂礫を蹴りあげると、それは散弾銃のように射出され広範囲を薙ぎ倒した。

上がる砂煙の中、あのとき思わず滑ってしまった口を潰したいと思う氷岬。

あのビリビリ中学生を軽くいなした後、氷岬は口直しとばかりにコンビニでコーヒーを買っていた。スコーンもあればよかったのだが、ないらしい。

仕方がなくコーヒーを一系列買うとし、それに手を伸ばした時、横から細すぎる手が伸ばされたのだ。

『あア？』

見た目は白。それはそれでどうかとも思ったのだが、とにかく第一印象が白だった。

その次に、その奇抜なシャツ。体の線がくつきりと分かるタイプのもので、なんでそれを選んだのか分からない。

そして、そのくつきり分かる体型である。

年頃の少年にしては細すぎる。もはや女性よりも細いかもしれないその体が見えた。

そして、少年の白さと相まって思わず紡ぎ出された言葉が、

『も、モヤシ』

そのあと、コンビニを大破させての戦闘行為になった。

「運動量の向きの操作だと？ 攻撃できないではないかッ！」

試しにそこら辺に転がっている石ころを音速に迫る勢いで投げつけて見ても、それは白い少年に当たる直前に投げた以上の速度で氷岬の頬を掠った。

どうやら、少年が最初に言った言葉は本当らしかった。

「し、知ってるか？ この世界には逃げるが勝ちって言葉があるのだよオッ！？」

飛んできたコンテナを紙一重で運良く避けられ、背中に汗がやばいほど噴き出す。

「ほオらほらアー!! まったく足りねエぞオ!! オカマ顔オツ!!」

「悔しい! けなされているのに反撃が出来ないことがこれほどに悔しいとは!」

最強の能力者が地面を踏みしめると、大地に亀裂が入った。そこから吹き飛ぶ砂礫が下から氷岬の体にぶち当たる。

「ああ、ローラ。僕、もう死にそう」

どうやら、まだまだ大丈夫そうだった。

|| ||

|| ||

「ぜ、っは、ぜ、っは! に、逃げれた、逃げれたよローラ!」

よくやった僕、後で自作のスコーンでも作って食べよう。

っていうか、今さっきローラ非情過ぎるよね? 話した瞬間にケータイブチるってどういう見だ無視すんなやゴラアアアアアアアアアアアアア!

『で、学園都市第一位の実力のほどはどう感じけるの?』

「……強いね。魔術については知らないみたいだけど、ちょっと天使の力こめた石投げつけたぐらいじゃ反射された。それが僕にぶつからなかったのを見て少しだけいぶかしむような視線を向けてきた

から、本当は当てるつもりで反射して、それでも完全には操作しきれなかったと見えるよ」

ローラに促されて淡々と戦況報告をのべる僕。まあ、仕方がないよ。

『ふうん。未知の力にもそれなりには対応しけるという意味よね』

「うん。そうなる」

『じゃあ、敵対しける時は、膨大な『天使の力』をぶつけるのが効果的かしら』

「それしか道は無いと思うよ。それが、これは能力者全般に言えることなんだけど、あの子たちは脳内で演算して、それをこの世界に現出させてる。ようするに、その脳の演算より速い攻撃なら当てられるし、演算を妨害する形で能力は発動させられなくなるよ」

『な、なんだか難しきことなりけるのね。——それにしても、お疲れ様、なのよ』

「べつ、別にローラのために頑張ったわけじゃないんだか」

ぶちっ。
ツ
ツ。

「チクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オ!!」

いいんだ。年の差のことは考えているさ。
けど、いつかは、ラブラブしてやるア！

………いつになれば、僕はインデックスさんに会えるのでせうか？

「……………小麦粉と、卵と……………スコーンの材料買って帰ろう。……………もちろん、ステイルと神裂さんの隠れ家に。……………太らせてやる、見目麗しいその体をスコーンでぶつくりと太らせてやる……………。うふふ、うふふふ。なんだか、楽しくなってきた」

知ってる？ 人って、いろいろ困難達成なことが重なると、笑いたくなるのです。

ん？ 例外？ 最強のどM？ 知るか。

第死地夢：学園都市第一位との邂逅とか誰が望んだんだよクソ野郎（後書き）

感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480u/>

とある邪眼の蛇遣い座

2011年11月13日08時51分発行